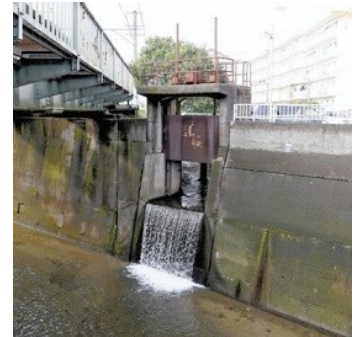


備忘録ないしは切り抜き帳(その121)

[2019年12月12日(木)]

○今朝の読売新聞に『さびつき開閉不能の水門、半世紀放置か…台風で付近浸水』と題する記事が掲載されていた。台風19号災害との関連で無視できないので、以下に転載させて頂く。「川崎市多摩区を流れる三沢川と灌漑用水「大丸用水」との合流地点に設置されている水門が、さびついて開閉操作ができないことが同区への取材でわかった。水門は約50年前に神奈川県が設置したが、いつから保守点検していないか不明という。台風19号でこの水門付近は多くの浸水被害が出ており、12日で上陸から2ヵ月となる中、危機管理の甘さが露呈している。大丸用水は多摩川を水源とし、東京都稲城市から多摩区内を流れて三沢川に合流する。灌漑用水のほか、雨水や生活排水も流れ込んでいる。合流地点の水門は幅3メートル、高さ1.8メートルの昇降式で、開閉は手動式となっている。台風で特に水門付近の菅稲田堤3丁目は、水門から用水路の上流400メートルほどにわたって周辺の住宅が浸水被害を受けた。三沢川の水位が上昇し、用水路の水が流入できなくなるとみられる。多摩区役所道路公園センターが台風の浸水範囲や原因を調べていたところ水門がさびで操作できず、開いたままの状態になっていることが判明した。水門は1971年に県が設置したが、それ以降保守点検した記録は一切ないという。どこが水門の維持管理業務を行うかも不明で、設置から半世紀近く放置されたままの状態だった可能性もあるという。三沢川の水位が上昇した場合、一般的には逆流を防ぐために水門を閉めるのが原則だ。今回のケースでは「用水路の水位もかなり高かったので、閉めれば被害が軽減できたかは今後の検証が必要」としている。同センターの青木誠所長は「いつから水門管理者の所在が分からないのかも不明で誠に申し訳ない。早急に県と相談してどう管理していくかを決めて対策を取りたい」と話している。多摩区によると、区内は約10万平方メートル浸水し、約350軒が被害を受けたという。」

p. s. さっそく稲田堤駅へ行き、三沢川と大丸用水の合流地点を確認してきた。本当に水門はさび付いていて長いこと放置されていたことに間違いなかった。近くの方に伺うと、浸水は1メートル前後はあったらしい。



開閉操作ができず、管理者も不明の水門
(川崎市多摩区で)



[2019年12月19日(木)]

○今日の夕刊各紙には、『高槻市教委担当者ら業務上過失致死容疑で書類送検へ 大阪北部地震でブロック塀倒壊し小4死亡』との趣旨の記事が掲載されている。一例として毎日新聞の記事を以下に転載させて頂く。「昨年6月に起きた大阪北部地震で大阪府高槻市立寿栄小のブロック塀が倒れ、4年生の女兒(当時9歳)が死亡した事故で、建築基準法に基づく安全点検などが不十分だった疑いがあるとして、大阪府警は近く市教委の担当者(当時)や点検を受託したビル管理会社の担当者ら業務上過失致死の疑いで書類送検する方針を固めた。事故は昨年6月18日朝に発生。最大震度6弱を記録した地震の直後、通学路に面したプール脇の塀が倒れ、登校中の女兒が下敷きになって死亡した。建築基準法の施行令では、ブロック塀は高さ2.2メートル以下で、1.2メートルを超える場合は補強用の「控え壁」を設置する義務がある。市教委がつくった第三者委員会の報告書によると、同校の塀は基礎部分(高さ1.9メートル)の上にブロック(同1.6メートル)が積み、地面からの高さは3.5メートルに達していた。控え壁もなかった。さらに、基礎とブロックをつなぐ鉄筋が平均約35センチと短い上、ブロック内の鉄筋と溶接されておらず、耐震性が低い構造だった。このブロック塀を巡っては、2015年、防災教室で同校を訪れた防災アドバイザーが危険性を指摘。市教委は翌年2月、塀を棒でた



高槻市立寿栄小のプールのブロック塀が倒れ、登校中だった4年生の女兒が下敷きになって死亡した現場を調べる警察官ら=大阪府高槻市で2018年6月18日(当時の毎日新聞より)

たく「打音検査」を実施したが、問題ないと判断した。2017年に定期点検を実施したビル管理会社も、目視で損傷状況などを確認しただけで、塀の高さや控え壁の有無をチェックしていなかった。塀は開校時の1974年に設置され、施工業者は既に解散している。市教委は取材に対し「重大な事故に責任を痛感している」と説明。ビル管理会社の代理人弁護士は「申し訳ない気持ちはあるが、塀が崩れることは誰一人として予想していなかった」と話している。(署名記事) 大坂北部地震の直後には本サイト『折々のトピックス』でも以下のような資料を掲載させて頂いた。このブロック塀は校内の水泳プールを外部から遮蔽するために後から設置されたもので、高槻市長自身がブロック塀の壁画を賞賛し、直近を通学路に指定するなど、地震防災上の視点は当初から皆無であったようである。建築学会でもブロック塀の耐震安全性の問題は1978年宮城県沖地震のころから注目していながら、実社会への注意喚起が不十分であったことが悔やまれてならない。



[2019年12月22日(日)]

○今朝の山陽新聞デジタルに『西日本豪雨の被災者 国や岡山県を提訴へ 治水対策など争点に損害請求』と題する記事が掲載されていたので以下に転載させて頂く。「昨年7月の西日本豪雨で小田川と支流が決壊し、甚大な浸水被害を受けたのは河川やダム等の管理が不十分だったためとして、被災した倉敷市真備町地区の住民が国などを相手に損害賠償を求める訴えを岡山地裁に起すことが21日分かった。小田川の治水対策や新成羽川ダム(高梁市)の事前放流の在り方などを争点とする方針で、来年3月にも提訴に踏み切る。岡山県内の弁護士約20人でつくる「真備水害訴訟弁護団」が準備を進めており、年内をめどに原告団を立ち上げる。現時点で約30世帯が参加を表明。他に相当数の世帯が検討しており、弁護団が最終的な意向確認を行い、賠償請求額を確定させる。弁護団によると、国が治水対策として今年11月に本格着工した小田川の付け替え工事について、約50年前にも付け替えが計画されていたが実現しなかった経緯から「国は工事の必要性を認識しながら先延ばししてきた」と訴える予定。新成羽川ダムに関しては豪雨の際に河川法を踏まえて事前放流を指示しなかったとして国を追及しダムを管理する中国電力(広島市)の運用責任も問う構えだ。さらに、河川の流下能力低下を招いているとして地元住民が再三要望していた小田川中州の樹林伐採、堤防の切れ目を板などでふさいで流水を防ぐ設備「陸閘」の活用、豪雨の際の避難指示などを巡り、国



西日本豪雨で面積の3割が水没した倉敷市真備町地区=2018年7月9日

と岡山県、倉敷市の責任を指摘するとしている。弁護団は昨年12月、真備町地区の被災者からの相談を機に結成。住民有志や防災を専門とする大学教授らを交えて決壊現場の視察を定期的に行い、賠償請求が可能かどうかについて検証を重ねてきた。豪雨で真備町地区は町域の3割に当たる約1200ヘクタールが水没し、直接死で51人が亡くなった。弁護団長の金馬健二弁護士(岡山弁護士会)は「国や自治体に災害への備えができていれば防ぐことができた被害は多い。二度と同じことが繰り返されないよう責任を追及していく」と話している」

- これに関連して、山陽新聞デジタルは11月29日にも『垂直避難できれば37%生存可能性 倉敷市が豪雨犠牲者の避難状況公表』と題する記事を発信していたので、続けて転載させて頂きたい。「倉敷市は29日、西日本豪雨により同市真備町地区で亡くなった全51人(災害関連死を除く)の避難行動調査の結果を初めて公表した。37%に当たる19人について、垂直避難していれば助かった可能性を指摘。犠牲者の約9割を高齢者が占め、要支援・要介護認定者は全体の4割近く、1人世帯も約3割に上っており、要援護者対策の重要性が改めて浮き彫りとなった。市は10～11月中旬、民生委員や住民団体、犠牲者の親族から聞き取り調査を実施した。住居で亡くなったのは42人で、2階建ての1階での犠牲者が22人と最も多かった。このうち浸水深5メートル未満で亡くなった19人は「垂直避難により助かった可能性がある」とした。65歳以上の高齢者は45人で、全体の88%を占めた。避難行動を追跡したところ、垂直避難や住居外への避難ができなかった人(39人)が全体の約8割。避難した人の中では、自宅に戻ったり、避難所に向かう途中だったりしたケースが目立った。家族や地域から避難の呼び掛けを受けながら命を落とした人(35人)も多かった。要支援/要介護認定者は19人おり、うち重度(要介護3～5)は6人。身体障害者も13人のうち重度(1,2級)が6人いた。1人世帯は16人だった。調査結果は西日本豪雨を受けて市が要援護者の避難対策などについて検討している会合で公表された。委員長の片田敏孝・東京大大学院特任教授(災害社会学)は、「超高齢社会の日本で、要援護者対策は喫緊の課題。共助も大切だが、地域でどうにもならない部分は行政が対応しなければならぬ」と指摘。伊東香織市長は、「日頃から1人も取り残さない活動を地域で進めていく必要がある。行政も各部局が横断して取り組んでいきたい」と話した。」

西日本豪雨 倉敷市真備町地区の死者 51 人の状況

◆死亡した場所			
住居	2階建て	2階	1
		1階	22
	1階建て	1階	19
屋外	屋外		7
	住居流失		2

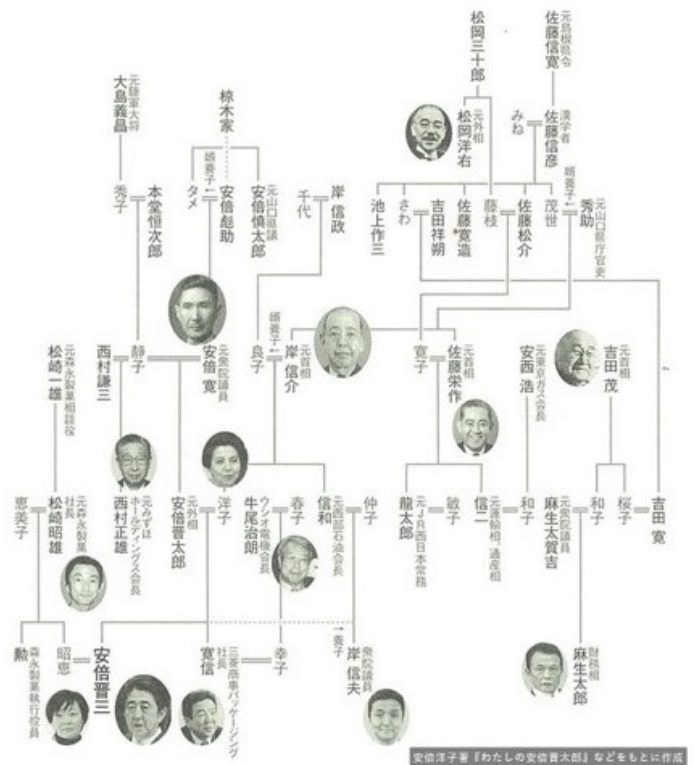
◆避難行動			
避難できなかった	2階建て	要支援者など	19
	住居	健常者	2
	1階建て	要支援者など	11
	住居	健常者	5
		救助・呼び掛け活動中	2
避難した		避難後に住居に戻った	6
		垂直避難した	2
		避難所へ向かう途中	4

[2019年12月23日(月)]

- 青木理著『安倍三代(朝日文庫, 2019)』を読ませて頂いた。この書籍の背景について『祖父は反戦政治家 安倍首相が決して語らない、もう一つの系譜「安倍三代」を辿って見えてきたこと』と題して、青木氏ご自身が語っておられるサイト(2017. 2. 21. 発信)があったので、以下に転載させて頂きたい。「母方の祖父・岸信介を慕う安倍晋三首相にはもうひとつの系譜がある。反戦の政治家として軍部と闘った父方の祖父・寛。これまでほとんど語られることのなかった「もう一人の祖父」の実像を丹念に追、安倍家の思想的なルーツを明らかにした話題の書……それが『安倍三代』だ。2度目の首相就任から4年、安倍政権が歴史的な長期政権へと向かういま、この本を著した狙いを、著者の青木理氏が明かす。日本政界の悲しき現在図 各種の世論調査によれば、安倍政権の支持率は相変わらず堅調に推移しているらしい。とはいっても、その実態をクサすのはさほど難しい作業ではない。たとえば今年1月6～9日に実施された時事通信の世論調査。調査結果によると、内閣支持率は51.2%になってはいるが、支持の理由に踏み込んで尋ねた回答を見ると「他に適当な人がいない」が最も多く、実に20%を超えている。過去の他メディアの調査では、同種の回答が4割近くに達しているものもあり、ようは安倍政権を積極的に支持しているというより、やむなく消極的に支持している層がかなりいることになる。この理由を解析するのも、さほど難しくはない。まずは民主党政権(2009～2012年)の“失敗”にともなうバックラッシュ。戦後初の本格的政権交代への期待が裏切られた反動はあまりに大きく、いまなお態勢を立て直せていない野党への幻滅が与党支持に雪崩を打たせている。政権がころころ変わり“決められない政治”などと評された一時期を経て、安定政権を求める心理も広がっていただろう。また、政治改革の旗印の下、1990年代半ばに導入された小選挙区比例代表並立制の影響も大きい。政権交代可能な二大政党制を目指したものとされ、現実に民主党政権誕生の引き金にはなったが、自民党でかつて隆盛を誇った派閥はすっかり



弱体化した。これ自体、是非の論議はさまざまあるにせよ、必然的に党執行部の力が飛躍的に高まり、党内は“風”が頼りのヒラメや小物議員が大量発生する現象を引き起こした。結果「次」を虎視眈々と狙うような“大物”は影を潜め、かつてのような自民党内での“疑似政権交代”すら起きなくなってしまっている。つまり、安倍政権が高くそびえ立っているというよりむしろ、周辺が軒並み陥没してしまっただけで、政権が高くそびえ立っているように見えてしまっている—といったあたりが日本政界の悲しき現在図であろう。とはいえ、そんな政権が現実に長期の執権を成し遂げ、「歴史的」と評されている事実も否定はできない。無惨な結末をたどった第一次政権期と合わせれば、安倍政権は昨年12月の時点で中曽根政権を抜き、歴代4位の在任期間を記録した。賛否が激しく分かれるにせよ、「美しい国」、「戦後レジームからの脱却」といったキャッチフレーズを掲げた政権は、集団的自衛権の一部行使容認に舵を切った安保関連法制や特定秘密保護法などを次々と強行成立させ、武器輸出三原則などはやすやすと打ち捨て、果ては共謀罪の導入や憲法改正まで目指すのだと公言している。70年にわたって営々と積み重ねてきた戦後日本の矜持を大きく変質させているのは間違いなく、その意味でもたしかに「歴史的」な政権ではある。だが、その政権の主・安倍晋三とはいったい何者なのか。何をエネルギーとし、あるいは何をルサンチマンとし、前へと突き進んでいるのか。政治を専門にする記者やジャーナリストの話聞いても、その手による記事や書物をいくら読んでみても、私は一向に腑に落ちない。「歴史的」とか「記録的」といった形容で語られるほどの迫力や磁力が現首相にあるとは、私には微塵も感じられないのである。なのに、政策への賛否を含めた「論」によって現政権を語る書物は数々あっても、政権を率いている男の根本的な人間像に迫った記事やルポはほとんど見当たらない。そればかりではない。政権がメディアに強圧的な姿勢を取りつづけているからか、あるいはメディアの側の劣化も激しいからか、読んでいてこちらが恥ずかしくなるような提灯本、御用本が書店に山積みされている。いちいち書名は挙げないが、幾冊かは大手メディアの政治部記者や元記者による著作だというから、これも偽らざる日本メディアの醜き現在図ということになるのだろう。「オレは安倍寛の息子なんだ」そんな苛立ちを募らせていた折、ニュース週刊誌「AERA」の編集部から、安倍晋三という政治家の素顔と本質を取材によって描いてみないか、という提案が私に寄せられた。正直、躊躇した。しかし面白い、とも思った。政治記者ではなく、政界になんの伝手やコネクションのない私だが、生い立ちにまでさかのぼって周辺を徹底取材し、この男の根本的な人間像をあぶり出す試みは、十分に挑戦してみる価値がある仕事だと思った。同時に私は、もっと大きな腹案を抱いた。安倍政権を支持するにせよ、しないにせよ、この男が現下日本政界における究極の世襲政治家であることに異論はあるまい。その系譜を取材によってたどれば、戦後日本の政治史を「論」ではなく、ミクロな事実の積み重ねによる俯瞰図として点描し、課題と問題点を浮かび上がらせることができるのではないかと。安倍晋三が母方の祖父・岸信介を敬愛していることは、あらためて記すまでもない。だが安倍には、もうひとつの系譜がある。父方の祖父・安倍寛もまた戦前・戦中に衆院議員を務め、実は相当に反骨な反戦政治家だった。なのに、このことはあまり知られていない。その息子であり、晋三の父でもある晋太郎は父・寛に憧れて政治の道を志し、口癖のように周辺者にこう語っていたという。「オレは岸信介の女婿じゃない。安倍寛の息子なんだ」岸の娘洋子との結婚が晋太郎の政界における跳躍台になったことは否めないが、「安倍家」という視座で眺めた場合、岸信介ではなく、国政への第一歩を記した安倍寛こそが政治のルーツにほかならない。なのに、安倍晋三が父方の祖父に言及することは皆無に近い。安倍寛とはどんな男だったのか。そして、安倍晋太郎とは。取材は1年以上に及んだ。ずいぶん苦労はしたが、安倍寛は魅力的な男だった。安倍晋太郎も、ノンフィクションライターの心を躍らせる数々のエピソードの持ち主だった。ではいったい安倍晋三はどうか—。



政財界に広がる安倍家の閥閥

恐ろしくつまらない男 取材の成果は「AERA」誌で約10回、断続的に連載し、それに大幅な追加取材と加筆修正を施す形で先ごろ『安倍三代』朝日新聞出版として上梓したから、興味のある方は拙著をぜひお読みいただきたいと思う。ただ、核心部分の一端はここで紹介しておきたい。失礼ながら、恐ろしくつまらない男だった。少なくとも、ノンフィクションライターの琴線をくすぐるようなエピソードはほとんど持ち合わせていない男だった。誤解してほしくないのだが、決して悪人でもなければ、稀代の策略家でもなければ、根っからの右派思想の持ち主でもない。むしろ極めて凡庸で、なんの変哲もなく、可もなく不可もなく、あえて評するなら、ごくごく育ちのいいおぼっちゃまにすぎなかった。言葉を変えるなら、内側から溢れ出るような志を抱いて政治を目指した男ではまったくない。名門の政治一家にたまたま生を受け、その“運命”やら“宿命”やらといった外的要因によって政界に迷い込み、与えられた役割をなんとか無難に、できるならば見事に演じ切りたいと思っている世襲政治家。その規範を母方の祖父に求めているにせよ、基礎的な教養の面でも、政治思想の面でも、政治的な幅の広さや眼力の面でも、実際は相当な劣化コピーと評するほかはない。だからこそ、逆に不気味で薄ら寒い日本政治の現在図が浮かびあがってくる。このような男が政界の階段をあっという間に駆け上がり、父方の祖父も父も射止められなかった宰相の座をやすやすと射止め、しかも「歴史的」な長期政権を成し遂げつつあるのはなぜか。戦後70年、営々と積み重ねてきた矜持が、劣化コピーのごとき世襲政治家の後づけ的思想によって次々と覆されてしまっているのはいったいなぜか。政権や政権の主ばかりを批判していてもどこか詮無い。課題や問題を抱えているのは、政治や政権の側ではなくむしろそんな為政者を戴いてしまい「歴史的」などと評される執権を許してしまう、日本政治のシステムと日本社会の側にあるのではないか—それが1年以上にわたる取材を終えた私の感慨である。(文中敬称略)

[2019年12月24日(火)]

○今朝の東京新聞[筆洗]を以下に転載させて頂きたい。「マスクをした男が土手に腰を下ろし野球を見ている。寒い。子どもの草野球とはいえ、ひどいしろものだ。とりわけ二塁を守るあの子。この回だけでエラーを二つ。さっきの打席もとんでもないボールに手を出し、三振した▼マスクの男の隣に別の男が座る。「ああ、見ておれん」。大柄のひげ面のその男は二塁手を見つめながらうめく。「でも、どうしても試合に出たいというものだから」▼二塁手がまたエラーをする。大柄な男がつぶやく。「父親が家を出てしまい、野球を教えてもらえなかったらしい」「でも、試合に出たいというものだから」。男は隣の男が誰なのか気がついた。なぜ自分がここにいるのかも▼二塁手の少年に打席が再び回る。初球を空振り。そして二球目も。打席で尻もちをつく少年に笑い声が上がる。すると大柄の男は目をつぶり、口の中で何かつぶやく。三球目。少年のバットがボールをとらえる。ボールは高く高く飛んでいく。マスクの男は立ち上がって打球を見守る▼ファウルとなる。結局、次の球で三振。男は大柄の男に食ってかかる。「ヒット一本ぐらい、あなたの力でなんとでもできるでしょうに」。大柄の男が答える。「それが不思議なお願いでな」。メモを取り出す。「お父さんが帰ってきて僕に野球を教えたくなるようにして、とある」▼本日小欄、少々趣向を変えた。よき聖夜を。」☺とても良い話なので備忘録に留めさせて頂いた。ただし内容を理解するのに3回ほど読む必要があった。

2019年12月24日 文責：瀬尾和大